

# 夕陽を浴びて

「お父さんなんて大嫌い！」と思わず泣き叫んだ高校生のことを思い出す。不登校二ヶ月目に家庭訪問したときのことだ。父親は登校しない娘に厳しかった。しかし、登校できない彼女は、できないことを要求する父を嫌った。もともと彼女はお父さんっ子で、大好きなその父親に、分かってもらえないから嫌いになった。好きなのに「大嫌い」と叫びたくなるような心の軋みから、涙が溢れてきたのだろう。

愛されたい(理解されたい)のにそれが叶わないから嫌いになる例は多い。愛されたい心がベースにあり、その基礎の上に「嫌い」という感情が乗っていることになる。そうすると、好きだけれど大嫌い、許したいけど許せないなどと、魂は、その両極の間で揺れ、そしてさまようことになる。

立場上このような「揺れ」につき合う私は、その人の心底にある「許しを求める心」に出会うことも多い。前述の彼女の場合もそうだった。私は彼女の話を聴き、その涙を見ながら、父親を嫌っている自分を許して欲しいという心があることを、確かなものとして感じていたのを思い出す。だから私は「子どもには親を好きになる権利があるんだよ。好きにならせて欲しいよね。厳しく言わないで許してほしいよね」という言葉をプレゼントすることになった。彼女の心の揺れが、いとおしかったからである。

「よく考えると、…怒ってばかりいたけど、私は…、許されたいのです」と、それに気づき話してくれた人もいる。話しながら彼は静かに涙を流した。それは気持ちの良い涙だった。私はその気づきが、急激に彼の心を浄化していくのを感じていた。揺れる両極の根底にある「許されたい」という心が、あたかも霧が晴れて見えてくる美しい景色のように、突然見えてきたからに違いない。

『禅林句集』に、「夕陽をあびて 谷の落ち葉を 掃く僧一人」という言葉がある。解説には「落ち葉は煩惱、執着の金鎖・鉄鎖である。ともすれば積もりがちな落ち葉を、一枚一枚根気よく掃き集める」とある。

「お父さんは大嫌い」という気持ちは我執であり煩惱そのものである。そのような落ち葉(煩惱)が無限に重なった山道が私たちの人生なのかもしれない。句集のこの言葉は、その落ち葉を一枚一枚根気よく掃き集めることを勧めている。…こう考えると、カウンセリングとは落ち葉を掃き集め、その一枚一枚をよく見つめ、整理することを手伝う作業なのかもしれないと思う。

ところで、落ち葉が煩惱だとすれば、春や夏の青葉は何なのだろう。…私は、ひよっとしたら煩惱の元なのかもしれないと思う。親なら、子どもなら、教師ならこうあるべきだという人生観は、この青葉に似ている。なまじこの「べき」があるから、その通りにならぬ相手を許せず、そして、やがて自分さえ許せなくなるのではないか。そうすると、もはや青葉は落ち葉(煩惱)になる。

しかし、だからといって、自他に理想を要求する人生観のすべてが悪いわけではない。理想と現実の間で葛藤する姿、すなわち煩惱の火に身を焦がす姿こそ、人の心に聖なるものが存在する証(あかし)と私は確信している。



一昨年(2015年)の十月七日、私は実(まこと)に神々しい紅葉を見た。穂高岳に通じる酒沢の紅葉である。それは厳冬を前に燃えるように輝いていた。この写真撮影の直後降り出したミゾレは、その夜のうちに初雪になり、翠朝の酒沢カールを白銀の世界に変えた。

落ち葉(煩惱)は、紅葉の輝きに限りなく近い。